

# for Better Sound Creation

## よりよき音色を求めて

「大和西大寺」は大阪・京都の両方面から古都「奈良」にアプローチする際の交通の要衝である。「平城宮跡」に隣接する文化的な街並の音楽的「要衝」をつとめるのが、天理楽器である。地域に8つの音楽教室を展開している同楽器店は早くからBSCに着目してきた。今回はプロ編とアマチュア編（ユーザーレポート「BrassSoundCats」）を合体させた特別編成で、古都「奈良」で素晴らしい楽器生活を送るBSCファンをご紹介します

楽に吹けて遠達性のある楽器ですね

奈良に生まれ、あの北村源三氏をはじめ錚々（そうそう）たる音楽人を生んだ京都堀川高校（現・京都市立音楽高等学校）でトランペットを専攻したヴェテラン、吉崎直之氏。同窓の「先輩」である北村氏に薫陶を受けた吉崎氏は、京都市立芸術大学を卒業後、名門金管バンド「ブリーズ・プラスバンド」を経て、現在は奈良県立高円高等学校吹奏楽部の非常勤講師をつとめるかわら、フリーランスとして関西圏を中心に大阪フィル、京都市交響楽団、宝塚歌劇場オーケストラなどで活躍されている。吹奏楽の指導者としても名声を馳せており、後述する「A-Winds奈良アマチュアウィンドオーケストラ」では指揮者として活躍している。

そんな吉崎氏が頼りにするのは、BSCの「オールラウンド（TR-206S）」だ。「吹き心地の軽やかさと響きのよさを合わせ持っているところが気に入って、また当時は為替の関係で今よりもちょっと安かったので（笑）あまり知らないブランドだったけれど思



天理楽器押前店にて。左から、天理楽器・西岡氏、魚谷氏、そして吉崎氏。501G以外の同店ありっただけのBSCとともに

いきって購入したんです。大成功でしたね。すごく吹き心地がいいので、力をいれなくても楽に長いフレーズが吹きこなせるんです。そして、パッと音を止めると、向こうの方からかすかに響く音が帰ってくる。つまり、遠鳴りがしているんです。

隣で吹いている人に言わせると、こちらがめちゃくちゃよく鳴るもんだから、やたらと頑張ってバテちゃう（笑）と嘆いてましたけど。どんなときでも、安心して吹けるのがいいですね。小回りがきいて粒だちがいい」

吹奏楽の指導もオケでの活動もされている吉崎氏に、その両者でのトランペットの選び方の違いを聞いてみた。

「オケでのトランペットは、他の楽器が盛り上げてくれたその頂点で吹けばいい。一発の威力がものをいう世界です。しかし吹奏楽で

はいろいろな役割が必要になる。コルネット的に唄ったり、木管楽器のようところどころやったり…しかも、最近の新曲は非常に緻密なアレンジが施されていて、楽器のポテンシャルを最大限ひきださなければならぬんです。だから、どかーんと鳴るだけではなく、小回りがきく楽器がいいんですね」

そんな吉崎氏からBSCを紹介され、すぐに気に入って入手したのが魚谷昌克氏。吉崎氏が指揮する「A-Winds〜」の団長でもある。ユニークな名前の由来は…そう、関西だからまず「ええウインド」という洒落から入るのである。

「あ、ウインズと複数形になりますんで（笑）」とすかさずツッコムところも、さすが。冗談はともかく、この「A-Winds〜」のAにはアマチュアのAやら、AクラスのAやら、さまざま



# 奈良ではの“ええウインド (A-Winds)”には、“ええBSC”が似合う



魚谷氏が創設し、吉崎氏も客演指揮する「A-Winds奈良アマチュアウインドオーケストラ」<http://www13.plala.or.jp/A-Winds/>

次回の演奏会は「ダンス！ダンス！ダンス！」と題して11月30日（日）「やまと郡山城ホール」でウエストサイドストーリー／Lパースタインなどを予定している



オールラウンド (TR-206S) は文字どおりすべての用途に使える、と語る吉崎氏



ベルのエンブレムなどマニア心をくすぐる



吉崎氏も学生時代から注目していた、という地元アマチュアの星、魚谷氏

まな思いがこめられている。

「アンサンブルのA…ではないですね（笑）。ただ、始めるきっかけとなったのは、少人数で楽しむアンサンブル的な雰囲気のアマチュア吹奏楽を楽しみたい、という思いからだったんです」

吹奏楽オリジナルにこだわる「A-Winds～」のリーダーでもあり、演奏面でもトップ奏者をつとめる魚谷氏は吉崎氏の一年先輩にあたり、当然奈良育ち。吉崎氏は学生時代、まぶしい思いで魚谷氏の活躍を眺めていた、という。「奈良では知らない人はいなかったでしょうね」と吉崎氏が言えば、「昔はトランペット吹いているひとがおらんかったからやる（笑）」とボケる魚谷氏。しかし、吉崎氏が指揮した「イーストコーストの風景」（ナイジェル・ヘス）のソロは、本当に感動的だった、という。

「それもBSCでした。とにかくピアノ、ピアノツッモの表現力が素晴らしい」

吉崎氏に薦められる前からBSCの存在はネットを通じて知っていた、という。遠達性のある楽器を捜していた魚谷氏は、BSCを試すために東京まで出向いて試奏した。「悩んでいたある日、吉崎先生から「天理楽器」にあるよ、と聞いて、ふたりで出向いたんです。で先生に聴いてもらって…」

いろいろ試した結果、吉崎氏と同様の「オールラウンド」で決着した、という。「天理楽器はBSCの在庫が豊富で、選べるのがうれしかったです」と微笑む魚谷氏。ものごしはやわらかだが、その意見には太い「筋」が一本、吉野杉のようにびしっと通っている。「A-Windsはガチガチのオリジナルマニアとい

うわけではないにしても、吹奏楽のために書かれた作品を大事にしようと考えているんです。楽譜も、絶対コピーしないで、買って来ます」

偉い。これぞ大人の楽器族のあるべき姿ではないか。さらに、吉崎氏は指導者の立場から吹奏楽におけるBSCを選ぶメリットを説明する。「たとえば有名な『ハリソンの夢』（ピーター・グレイナム）は、どの楽器にも限界ギリギリのところを要求してきます。「ダンスムーヴメント」（スパーク）も、楽器の限界から新しい響きを引き出そうとしている。純い楽器だと対応できないんです」

プロもアマも、吹奏楽にはオールラウンド！というのが、古都「奈良」での結論のようだった。